
【習作】魔導師と魔法使い

kirei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【習作】魔導師と魔法使い

【Nコード】

N7592X

【作者名】

kir ei

【あらすじ】

新暦0079年、特殊部隊に所属する魔導師アレン・クロフォー
ドは任務中に突如現れた鏡に吸い込まれてしまう。

第0発目（前書き）

この作品はリリカルなのはForceやVividとは違う道を選んだIFの世界のオリ主が主人公です。

さらにオリジナル設定もありますのでそういうのが嫌な方はお引き取りください。

第0発目

- 新暦0079年8月24日2040時 第19管理世界 -

亜熱帯特有のむしむしとしたジャングルを12人の男達が行軍を行っていた。

男たちは迅速でありながら痕跡をほぼ残すことなくジャングルを進み続ける。

彼らは第19管理世界の元現地軍残党によって構成されたゲリラ部隊であり、彼がジャングルを行軍しているのはこれからこの地でゲリラ殲滅を行っている時空管理局部隊を強襲するためである。

スケジュールどおりに行けばそろそろ陽動部隊が行動を開始するはずである、そうなれば彼らの分隊を含む約1個中隊が一斉に攻撃を開始する手筈になっている。

そうスケジュールを思い出し分隊長は僅かに唇の端を吊り上げる。時空管理局の奴らに目に物見せてやろと思ったところで彼の意識は闇へと沈んだ。

『初弾命中、次弾装填中・・・装填完了』

デバイスの機械的な男性の音声放たれた半実体化魔法弾が標的に着弾したことを告げる。

超高倍率スコープを覗く男はそれに答えることなく伏射姿勢フローンのまま通信装置を背負っている敵兵にバレットM82に酷似しているデバイスの砲口を向け、即座にトリガーを引く。

砲撃音と共に強い衝撃が男を襲うが男はスコープから目を離すことなく着弾を見届ける。

『命中確認、お見事です』

初弾命中から次弾発射まで約2秒。

遅いなと男は呟く。

調整を怠ってはいないが連日の酷使に身体もデバイスも予想以上に損耗しているようである。

だが今はそんな事考えてる暇はないと頭からそんな考えを追い出す。

「弾種変更キャニスター。数4、クラスターモードに設定」

『了解、キャニスターシエル』

「撃て」

放たれた4つの淡い水色の魔力球は放物線を描き寸分変わらず目標上空へと辿り着き静止した。

そして静止した魔力球から無数の子弹が降り注ぎ起爆する。

約10分に渡り行われた砲撃は進行していた敵を行動不能に落としいれるのだった。

第1空挺大隊。

それが彼、アレン・クロフォード一尉が所属する部隊の名前だ。

空挺大隊とは言うものの部隊そのものは陸上部隊に分類されている。新暦0075年に発生したJS事件以降、次元航行部隊と陸上部隊は統合され統合軍へと名称を変更した。

さらに、管理世界全体をひとつの国とする次元統一国家構想も始動しそれに猛反発する反管理局組織が各地でテロ行為を行い始め治安は悪化の一途をたどっている。

そんな中、圧倒的に戦闘要員が不足している管理局は苦肉の策として個人携行が可能な物に限り質量兵器の使用を認めることを宣言、これにより多くの人員を確保することとしたが、問題が発生する。それは、錬度不足である。

質量兵器を扱ったことのある局員はほとんど居らず戦力にならないとされてしまったのだ。

そこで統合軍は各部隊から質量兵器を扱ったことある兵を集め教導隊を結成すること決定した。

第一空挺大隊の前身の特務教導隊である。

構成員の9割強が第97管理外世界、地球で兵役にしていた者で構成されていた。

特務教導隊は直ぐに結果を残し始める。

前線で教導を繰り返した彼らは自身らも前線に出向き大規模作戦を成功に導いた。

そして新暦77年に特務教導隊は解散されたが、イギリスのSAS等の特殊部隊をモデルに第1空挺大隊が再編されることとなる。

第1空挺大隊の主任務は単独での潜入任務や後方攪乱等でありさらに質量兵器と魔法の運用についても研究することが求められている。

「だからよお、イカサマしてんじゃねーよ!」

「おいおい、イチヤモンはやめるよチョッパー。俺の強運しってる
だろ?」

第1空挺大隊が駐屯している駐屯地のPXでは喧騒が絶えた日は
ない。

ある者は賭けに興じある者はデバイスのアクセサリキットのカタ
ログを仲間と談笑しながら読んでいる。

そんな中でアレンもデブリーフィング後のコーヒーを楽しんでいた。

「隊長! 隊長からもクソツタレのブレイズにいつてやってください
よ」

先ほどから賭けに興じていたアレンフォート三尉、通称チョッパー
がアレンの元へと駆け寄った。

どうやら副隊長のブレイズとのポーカーに勝てないためイカサマを
しているのだと踏んだのだろう。

「諦めるチョッパー、ブレイズの強運は本物だ。奴はベガスの全て
のカジノから出禁を食らってるんだぞ?」

「ちょ、それマジかよ!」

「さて何のことやら、ただベガスのカジノに近づくと黒服の強面の
男達が近づいて来るのは確かだな」

第1空挺大隊には第97管理外世界、地球の出身者が多い。
そのため地球の地名でも普通に通じるのだ。

『マスターも人が悪いですね』

「ふん、聞かれなかったから教えなかっただけだ」

シルバーブレスレットに赤いコアという待機状態になったデバイス
――パトリオットがアレンに話しかける。

先ほどまで行っていたメンテナンスが嬉しかったのだろう若干機嫌
が良いようである。

だがそんな安穩とした時間は直ぐに終わりを告げた。

【緊急連絡、小隊長以上の各隊長は至急207ブリーフィングルームへと集合せよ繰り返す】

第2種戦闘配置（デフコン2）を伝えるアラートと共に隊長クラス
に召集命令がかかる。

それを聞いたPXにいた隊員たちは直ぐに待機ポイントへと急行する。

「チョッパー！貴様に一時的に第1中隊の指揮を預ける！万が一の場合は独自の判断で行動しろ！」

「了解！これより指揮権を預かります！」

指揮権の譲渡を終えるとアレンはブレイズの方を向く。

それに気付いたブレイズは軽く頷く。

アイコンタクトを終えた二人は207ブリーフィングルームへと駆

け出すのだった。

「では状況を説明する。本日1005時に掃討作戦中だった第3905陸士中隊からの交信が途絶、通信司令部は直前の通信状況から敵部隊と接触しAMF下に入ったものと判断し近隣で作戦行動中だった次元航行艦グリッペンの武装隊に支援を求め武装隊が急行するもののその武装隊も交信を途絶した、さらに1058時に第302野戦基地が交信を途絶した」

その言葉にブリーフィングルームがざわめきに包まれる。
第302野戦基地はこの第309駐屯地を含む地域の制空を担っているのだ、其処が落とされたとなると……。

「制空権を奪取されたのは痛いですね、各駐屯地には分隊程度の航空魔導師しかいない」

「近くの航空基地となると207か？」

「そこからじゃ遠すぎるな。それにあっちの方面も激戦区だ」

「うむ、そこで第19管理世界統合軍司令部は第302野戦基地奪

還作戦を発令した。我々第3方面軍はその総力をもつて第302野戦基地を奪還せよとのことだ」

駐屯地司令の言葉にこの場にいた全員の雰囲気かわる。

第3方面軍は9の駐屯地と1つの航空基地から編成されており約一個師団が配備されている。

つまり今回の奪還作戦には1万以上の人員が投入されるのだ。

「では作戦を説明する。まず第一に第302野戦基地を距離2000で包囲する。その後、砲撃魔法による飽和攻撃を実施し徐々に戦線を押し上げ距離900まで包囲網を狭める。ここまでがフェイズ1だ、フェイズ1完了後、第1空挺大隊はヘリボーンによる強行突入を行い人質の確保を行う、人質を確保した時点でフェイズ3へ移行する。フェイズ3は包囲していた全軍による突入及び掃討戦となる。なおフェイズ2及びフェイズ3に移行した際には殺傷設定の使用を許可する。何か質問は？」

司令の問いにアレンは即座に手を上げた。

「ふむ何だね、アレン・クロフォード一尉」

アレンはスッと立ち上がる。

「万が一人質の確保に失敗又は人質が殺害されていた場合は突入部隊の援護行動に移りますがそれでよろしいのですか？」

「おお、その場合のことを忘れていたよ。うむ、その場合は各中隊長の判断に任せる」

「了解」

それだけ聞くとアレンは着席する。
次に302野戦基地の詳細な見取り図がスライドに表示されていく。
突入口となるのは、屋上出入り口と各階の窓だろう。
どこから突入するかはわからないがどんな状況でも的確に動くだけだ。

アレンはそう考え、脳内でシュミレーションを開始した。

- 新暦0079年8月25日1900時 第19管理世界 -

奪還作戦開始から60分がたった今アレン達第1中隊はヘリの中で装備の確認を行っていた。
アレンも既にP90に似たSMGモードでパトリオットを待機させていた。

「パトリオット、装備の確認を」

「APモード用のスモールカートリッジが300発、SMGモード用のショートカートリッジが200発、ARモード用のカートリッジが400発、AMRモード用のラージカードリッジが100発、各種グレネードが10発づつ、45ACP弾が120発、5.7x2.8mm弾が200発、5.56mm弾が400発、12.7x

99mm弾が100発、各種グレネード弾が10発、各種アクセサリ、単独での攪乱任務が1週間はおこなえます」

格納デバイスにメンテデバイスもある。

これだけあれば本当に単独攪乱任務も可能だな。

そうアレンが思った瞬間ヘリが大きく揺れた。

「くそっ！SAMだ！」

機長が叫ぶ。

どうやら地对空ミサイルにロックされたようだ。

「フレア、チャフ撒布！なんとしても彼らを送り届けるぞ！」

「イエス、キャプテン！」

機長と副機長が何とかミサイルを躲そうとする。

ヘリは大きく揺れ第一中隊の面々は何かしらにしがみ付いていた。

だが彼らの奮闘むなしくミサイルがヘリの間近で起爆し爆風によって姿勢を崩したヘリからアレンを含めた全員が放り出された。

そして、ヘリが落着し爆発、炎上する。

咄嗟に飛空魔法で姿勢を制御したアレンは辺りを警戒しつつ着陸する。

この爆発だ、直ぐに敵が来るだろうと踏んだアレンは仲間と合流すべくビーコンを確認する。

だが、一切の反応が帰ってこない。

『警告、1時、6時、9時の方角に動体反応、敵部隊と予想されます』

「くっ、味方部隊との通信は？」

『ジャミング下にあるのか通信は不可能です』

「くそっ！転移魔法を使用し包囲中の味方部隊と合流する」

『了解、座標固定・・・・・・・・完了』

アレンはこのまま単独で突破するよりも一旦後退することを選択し
転移魔法を使用すること決める。

アレンの足元に淡い水色の魔方陣が現れ回転する。
そして転移しようとしたそのとき。

『警告、小規模の時空震を確認。転移座標固定不可能』

その瞬間アレンは突然現れた鏡のようなものに吸い込まれ、意識を
手放した。

「・・・・・・・・ドラゴンと人？」

そのころアメリカ人は運命に出会う。

第1発目

- 始祖暦6242年フェオの月 トリスティン魔法学院 -

晴れ渡る晴天の中トリスティン魔法学院では春の使い魔召喚の儀が行われていた。

そして今まさに召喚を行っている少女がいる。

少女の名はタバサ。

どう考えても偽名だが、誰もそれについては触れようとしない。

1年共に過ごしたと言うのもあるが、彼女がここにいる中でも最高クラスの魔法使いであることが関係している。

ここトリステイン魔法学院があるハルケゲニアの地では家柄と何よりも魔法の腕がその人物を図る指標となっている。

そんな中でも彼女はトライアングルという高ランクのメイジなのだ。そんな彼女の前に透き通るような美しい青色の鱗を持った体長6メートル程の風竜が現れていた。

風竜は全ての竜種の中でも圧倒的な飛行速度を誇る。

これには周囲に居たタバサの同級生たちも驚く。

使い魔もまたメイジとしてのランクをはかる指標となりうるのだ。

だが、それだけでは終わらなかった。

再び召喚の際に見せる兆しが現れたのだ。

そうして、風竜の足元に一人の男性が現れたのだった。

アレンは突如として現れた鏡に吸い込まれたのち意識を失ったが直ぐに意識を覚醒させた。

伊達に過酷な戦場を渡り歩いてはいないのだ。

そうしてアレンが目覚めると其処にはどこまでも続くような青空と青色の竜、そして蒼髪の年は12位と思われる少女が視界に映った。

徐々に覚醒してきた頭は現状の確認を行い始める。

所属と官姓名は？

第1空挺大隊所属のアレン・クロフォード一等陸尉。

ここに来るまでに何をしていた？

敵に制圧された第302野戦基地を奪還すべくヘリボーン作戦を行っていたが敵のSAMによってヘリが撃墜された為、包囲部隊と合流すべく転移を行うとしたが時空震に巻き込まれ失敗、そこで気絶。リンカーコアやその他諸々の部位にも損傷はなし。

そして、見たことも無い場所にいると。

さて如何したものか。

アレンがそう思考していると、ふと周りが騒がしいことに気付く。曰く、「雪風のタバサが風竜と平民を召喚した」だの何だのといっている。

「………、ドラゴンと人？」

少女の呟きにも困惑の色が含まれている。

先ほど聞こえてきた召喚がどうかと言う言葉から様々な予測を立てる。

その中で一番有力であると思われる予測を目の前の少女にぶつけることにした。

「ふむ、一つ聞きたいのだが俺をここに召喚したのか？」

アレンの問いに少女は肯定の意を込めて頷く。

それを確認したアレンは立ち上がり辺りを見回す。

するとこの場の責任者らしき黒いローブに長い木の杖を持った男性が近づいてくる。

その身のこなしから従軍経験者であると気付いたアレンは即座に発砲が可能なようにパトリオットのセーフティーを解除しトリガーに指をかけた。

「お話の途中失礼します。私はジャン・コルベール。二つ名は『炎蛇』。このトリステイン魔法学院の教師を務めている者です。ミスタ、えー、失礼ですが、お名前を伺ってよろしいでしょうか？」

「私は時空統合軍第1空挺大隊第1中隊中隊長のアレン・クロフォード一等陸尉であります」

「時空統合軍ですか・・・、えー少し質問させて貰ってもよろしいですか？」

コルベールと名乗った男性をアレンはまじまじと観察する。

先ほど従軍経験者と睨んだがやはり間違いないようである。

所属は特務部隊といったところだろうか。

表向きはにこやかに対応しながらもその目は冷たく鋭い。

魔法学院教師と名乗ったからには魔法が使えるのだろう。

となるとこのコルベールと名乗った男性クラスの魔導師がいるとみて良いだろう。

これは交戦するだけ無駄だな、とアレンはマルチタスクで様々な可能性を考慮しつつ判断する。

それに根底にあるのは司令部は既に作戦行動中行方不明（MIA）と認定されているだろうという諦めと、必ず生き残るという信念があるからだ。

「まず此方には交戦の意思が無いことを伝えておきます、必要ならば武装解除も行いましょう。その代わり、ここの最高責任者を交えて話をさせていただきたい」

アレンがそう伝えたと、コルベールは驚いた用に目を見開く、が直ぐに平常心を取り戻したのかコクリと頷いた。
どうやら、話のわかる人で助かった。

アレンはそう思いつつ、パトリオットに命令を下す。

「パトリオット！」

『了解、武装解除、待機モードへと移行します』

パトリオットが応答すると同時にアレンの頭から足へと光の輪が通り、ブラウンを基調とした陸士部隊の制服姿へと変化した。

「では、これとこれを」

アレンはそう言い、コルベールに待機状態のブレスレットとなったパトリオットとナイフを手渡す。

「これは？」

コルベールはいきなり手渡されたブレスレットとナイフとアレンを交互に見ながら問う。

「私の武装一式です。何ならば両手を拘束しますか？」

アレンは両手を差し出す。

だがコルベールは首を横に振った。

「いえ、その必要は無いでしょう。では案内しま……、申し訳ない少しお待ちを。ミス・タバサ、貴女はその風竜とコントラクト・サーヴァントを行いなさい、無事に済んだのなら学園長室にくるように。では、私は彼を学園長の元に案内しますので皆は代理の先生がくるまでココで待っているように。失礼、では参りましょう
ミスタ・クロフォード」

コルベールはそう言いアレンを連れ学園長室へと向かった。

「ふむ、つまり貴官は作戦行動中に召喚に巻き込まれた異世界の間ということかのう」

このトリステイン魔法学園の長たる偉大なるオスマンオールドはアレンが語ったことを脳内でまとめつつ話を進める。

「簡単に言つとそんなところですね」

アレンはパトリオットに記録されているデータを表示しながら細かく説明していた。

途中で合流したアレンを召喚した少女――タバサも加わりお互いの情報の刷り合わせは続いていた。

「まあ、虚数空間に飲まれずにすんだことと敵に捕まって拷問を受けずにすんだことを感謝すべきか？」

結論としてアレンはそう判断し、無理やり呼んでしまったことを悔やんでいた様子のタバサに気にするなと笑いかけるのだった。

「それで、お主は使い魔として呼び出されたわけじゃが……」

使い魔とは、メイジの目となり耳となり手足となり盾と剣となる存在である。

魔導師にとってのデバイスのようなものだなとアレンは思った。

「ミス・タバサ、貴女は風竜とのコントラクト・サーヴァントは成功したのでしたね」

コルベールの問いにタバサはコクリと頷く。

実際、タバサは風竜との契約に成功している。

だからといって、自分のせいで見知らぬ地に呼び出されたアレンを見捨てる気など無かった。

「じゃが彼が呼び出されたのも始祖ブリミルの思し召しじゃろうて、ミスタ・クロフォード貴官さえ良ければミス・タバサの護衛兼執事としてココにいてはくれんかのう。勿論、賃金をだそう。どうじゃ？」

オスマンの頭の中では、複数の打算が動いていた。まず一つはもしもアレンの言う次元航行艦が救助に来た場合、アレンに出来るだけの援助を行ったという事実は大きいだろう。

士官を拉致同然で呼び寄せたことを拭い切れなくてもアレン自身がうまく働きかけてくれるに違いないだろう。

次に、タバサ自身のことである。

タバサは極秘であるがガリア王家の血を継ぐ存在であるため、例え王位継承権が無くても常に危険と隣り合わせにあるのだ。

そこで、このハルケギニアのしがらみに一切とらわれないアレンを側に置くことでタバサの身を守ろうとしているのだ。

「悪い話しでは無い・・・か。詳しい条件は後で詰めるとして、彼女が良ければその話を受けよう」

アレンのその答えにタバサは驚きの表情を浮かべた。

簡単に言うとは誘拐犯の護衛を引き受けたのだ、驚かないほうがどうかしてるだろう。

「私は、かまわない」

タバサはそんな彼に驚いたまま承諾するのであった。

オスマンとアレンの間で交わされた条件は

・アレン・クロフォードは事故で召喚に巻き込まれた異国のメイジであるということにする。

・扱いとしてはタバサ個人の執事兼護衛であるが貴族とほぼ同等の権限が与えられる。

・学園から毎月一定額の給与を与える。

逆に学園側からの条件は

・常にタバサの側にいること。

・管理局が救援に来た際はオスマン又はコルベールをトリステインとの交渉窓口にすること。

そして双方に、この場での会談内容は部外秘にすること。

という条件を飲むことで双方合意した。

「いめんなさい」

学園長室を後にし寮棟へと向かう道すがらタバサはアレンへと頭を下げた。

そして頭を下げられたアレンは行き成りの事に驚きを隠せなかった。

「なにがだ？」

「貴方を無理やりに召喚してしまったから」

どうやら予想していたより、心が優しい子の様だ。

アレンはそう思いつつ苦笑する。

「なに今回のことは事故だ、どちらが悪いという訳ではないよ」

アレンがそう言うが、タバサは気に病んでいるようだ。

どうしたものかとアレンが考えているとパトリオットが声を上げる。

『ならばミス・タバサがマスターにこの世界の言葉を教えるというのは如何でしょうか』

「ああ、それはいいアイディアだ。タバサそれで貸し借り無しというのはどうだ？」

「貴方がそれで良いなら」

タバサもその条件に渋々だが同意した。

それならばと、アレンは右手を差し出す。

「ならこれから宜しく頼む。ああそうだ、俺のことはアレンで構わない」

アレンがそう言うと、タバサはその小さい手でしっかりとアレンの手を握り返すのだった

第2発目

- 始祖暦6242年フェオの月 トリスティン魔法学院 -

アレンたちが今後の対応を協議しているころ、未だ続いていた使い魔召喚の義において再び問題が発生していた。

問題を引き起こしたのは美しいピンクブロンドの髪を持つ少女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールであった。

「あんた誰？」

そしてルイズの前に仰向けで寝転んでいる少年に尋ねる。

先程、雪風のタバサも人を召喚していたがあの時はドラゴンも居た。ならこの寝転んでいる少年の他に何かいないか探しキョロキョロとする。

「誰って……俺は、平賀才人」

召喚された少年……才人も上半身を起こしキョロキョロと辺りを見回す。

その様子をコルベールの代理として召喚の監督を行っていた学園長の秘書であるロングビルも少し離れたところで観察していた。

彼女はざわついている生徒達を尻目に召喚された才人に解析魔法を使う。

ロングビルはコルベールの代理を任せられる際に事情を詳しく聞いており、今召喚された才人が現在学園長室で話しているアレンと同じように軍人もしくは、武装していた場合を想定していた。

だが、才人に武器の類や杖を持っているような気配が無いため緊張を解く。

そして現在進行形で喚く本日二人目の異邦人に哀れみの視線を向けるのだった。

・同日 夜 トリステイン魔法学院 寮棟 タバサの自室・

アレンとタバサは、タバサの自室にて今後の方針を詰めていた。といっても実際には寝る場所やハルケギニアの作法や各地の地名、お互いの世界の話や趣味の話など雑談を多く含んでいるのだが。そしてタバサはアレンが語った無限書庫に興味を示した。

アレンは仕事柄、様々な資料を必要とするし何より司書長のユーノ・スクライアとは家族ぐるみの交友もあり休日は良く無限書庫に入り浸っていた。

そしてタバサは知識欲が大きく片時も本を手放さず暇さえあれば本を読んでいる本の虫といえるものがあり、蔵書量がその名の通り無限に等しい無限書庫は楽園とも思えたのだ。

そして、学園長が気を利かせてくれたのか二人分の食事が運ばれ二人で其れを食した。

アレンはフランス料理に近しいそれに舌鼓をうつ、レーションや蛇といった野生の動植物を食らうことが多かった身としては、味付け

や見た目を重視した料理は久しく食べておらず、久々のご馳走であった。

食事を終えたアレンは腹ごなしの運動と訓練をかねて夜間飛行を楽しんでいた。

訓練を兼ねているためB Jは夜間迷彩色に設定されておりパトリオットはM 4に酷似したA Rモ^{アサルトライフル}ードになっており、アクセサリーは中距離狙撃スコープにバイポッド（二脚）だ。

アレンは眼下に流れ行く森を眺めつつどこか良いポイントは無いか注意深く観察する。

この辺りの地形はタバサに説明を受けていたもののやはり実際に見ると違うものだなとアレンは思う。

戦闘は所持している情報が多いほうが勝つ。

作戦範囲の地形、気温、湿度、魔力濃度、風の吹き方、敵軍の規模e t c情報が多ければ多いほど待ち伏せや襲撃は楽になる。

そうこうしている内に粗方の確認を終えたアレンは森の中に着陸する。

「ターゲットドローンを前方距離700～1000に撒布。数、動きはランダムに設定」

『了解、撒布開始します』

アレンの指示に従いパトリオットはランダムに魔法で構成されたターゲットドローンを撒布する。

『撒布完了』

其れを聞いたアレンは伏射姿勢を取りスコープを覗く。
そして調整、それに連動するようにパトリオットが各種情報を収集する。

その作業も10秒と経たず終了し、アレンはトリガーに人差し指を掛ける。

そして一度深呼吸をし発砲。

セレクターはシングル、弾種はヴァリアブルバレット・APモード。
放たれた魔法弾はドローンの中心を撃ち抜く、其れと同時に2つ目、
3つ目も破壊。

アレンは一瞬のうちに3射し全て中心を撃ち抜いていた。

そして、アレンは右手にパトリオットを構えたまま立ち上がりドローンに照準を合わせ発砲。

そのまま、右に跳躍。

捻りこみを加え衝撃を殺しつつ伏射体勢で着地し即座に発砲。

そうして、全てのターゲットを破壊するのだった。

「パトリオット、先程の評価を」

『命中率、殺傷率共に100%。若干魔力にブレが見られましたが誤差の範囲内です』

パトリオットが表示するデータに目を通しつつアレンは森の中を歩いていた。

目的地は飛行中に発見した湖だ。
湖の畔についたアレンはためらい無く制服を脱ぎ去りキレイに畳む。そして格納デバイスから代えの下着類と訓練用の野戦服を取り出し下着のまま湖へと入る。

「おおう、流石に寒いな」

予想より湖の水が冷たかったのかブルリと震えたアレンはさらに湖の奥へと進む。

そして深さが腰に達したぐらいで泳ぎ始めた。
バシャバシャと目的も無く泳いでいたアレンは仰向けに浮かび満天の星空を見上げる。

人工の光にさえぎられることの無い星々の瞬きと二つの月を眺めつつアレンはこれからのことに僅かに思いを馳せると同時に自身の胸にある大きな傷跡に手を載せ心臓の鼓動を確かめるように目を閉じた。

「お姉さま、お姉さま、お兄様が居たの。水浴びしてるの、気持ちよさそう」

タバサは使い魔の風竜であるシルフィードに乗り夜空を飛んでいた。

湯浴みを終え、部屋に戻るとアレンが帰ってきておらず、話の続きをするために探しているのだ。

都合のいいことにシルフィードがアレンの匂いを覚えていたために直ぐに足取りはつかめた。

そういえばと、タバサは楽しそうに飛ぶシルフィードに視線を向ける。

シルフィードは確かに風竜であったが、ただの風竜ではなく韻竜という人語を理解し話すことが出来る伝説の中にのみ生きていたと思われる。われていた種族だ。

韻竜といい異世界のメイジと言い本当に自分は妙なものに縁があるものだと考えたところで、タバサの視界にもアレンの姿が見え始めた。

『警告、正体不明の飛翔体が接近中。……………訂正ミス・タバサの生体反応を確認』

アレンが目をつぶり湖に浮かんでいると、パトリオットがタバサが近づいていることをつげる。

アレンは緩慢とした動きで目を開く。
すると、何かが羽ばたく音が聞こえてきてアレンの視界に召喚された際に居たドラゴンの姿が映った。

「ドラゴン……か」

アレンは少し忌々しげに呟く。

そうしている内にドラゴンが高度を下げドラゴンの背に乗ったタバサとアレンの視線が合う。

アレンはタバサを見つつ、やはりもう少し発育が良ければ……な
どと考える。

「なにをしてるの？」

「見ての通り浮いてる」

「なぜ？」

「気持ち良いから。…………もう直ぐ上がるから向こうで待ってくれ」

アレンが岸を指差しなが言つとタバサはコクリと頷き岸へと向かった。

それについていくようにアレンも岸へと向かって泳ぎだすのだった。

その後、アレンとタバサは遅くまで話し込み、パトリオットの『翌日の授業に支障ないのですか?』という一言によってようやくお開きとなったのだった。

そして、アレンは明かりの消えた部屋で空間スクリーンに表示される情報を読んでいた。

表示されている情報はJS事件以降からの管理局の大まかな動きである。

「やはり、今の管理局はなにかおかしい」

新暦0075年のJS事件後に発生した管理局の不祥事のほとんどはハラオウン派と呼ばれるグループかもしれないが、陸の過激派と呼ばれる旧レジアス・ゲイズ派の人間が目立つ。

特に大きな事件は、当時陸と海を統合し統合軍とすることに猛烈に反発していたハラオウン派の筆頭たるクロノ・ハラオウン提督と聖王協会が癒着しており多額の賄賂を受け取っていたとされる事件だ。捜査に加わっていたわけでは無いため詳しくは知らないが、直接あったことのある身としては賄賂を受け取るような人間には思えなかった。

この事件は癒着事件としては異例の速さで裁判が終了した。判決は有罪。

クロノ・ハラオウンは管理局員、魔導師としての資格を剥奪され今も高軌道刑務所に収監されている。

これにより、ハラオウン派は瓦解し、さらに過激派も有力な将官の不祥事や死亡事故が相次ぎ、結局統合案が賛成多数で可決され統合軍が誕生するのだった。

資料を読みふけていたアレンはふと、パトリオットが提示していた資料から懐かしい写真を見つけた。

新暦0076年に行われたユーノ・スクライアとなのは・T・スクライアの結婚式の写真だ。

写真にはフェイト・T・ハラオウン執務官と八神はやて2佐といったJS事件解決の立役者達が映っていた。

この写真に写るもの皆笑顔である。

「なぜ、あんな事になったんだろうな」

アレンがポツリと呟く。

パトリオットはそれに返す言葉を持たず、タバサはただ静かに寝息を立てるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7592x/>

【習作】魔導師と魔法使い

2011年11月13日23時32分発行